東北大学大学院教育学研究科
教　授　菊池　武剋

成年年齢の引き下げについて

○現代の若ものたちについての指摘について

『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』より

> ○　精神的・社会的自立が遅れ，人間関係を築くことができない，進路を選ぼうとしないなどの子どもたちが増えつつあることが指摘されている。
> ○　高等教育機関への進学割合の上昇等に伴い，いわゆるモラトリアム傾向が強くなり，進学も就職もしようとしなかったり，進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加が指摘されている。

(1) 子どもたちの成長・発達上の課題

子どもたちの成長・発達をめぐっては，身体的には早熟傾向があるにもかかわらず精神的・社会的自立が遅れる傾向にあること等が，各方面から指摘されている。また，最近では，遊びや消費活動，情報活用能力等における早熟化が進む反面，生産活動や社会性等に未熟さが見られるなど，発達上の課題が一層顕著になっていることが指摘されている。

この背景には，幼少期からの様々な直接体験の機会や異年齢者との交流の場が乏しくなったこと，豊かで成熟した社会にあって人々の価値観や生き方が多様化したことなどが考えられ，そのことが自己や他者及び身の回りの環境等への関心や勤労観，職業観の形成・確立など，子どもたちの発達課題の達成を困難にしていると考えられる。

また，子どもたちは，自らの成長・発達を支える上で不可欠な「社会の現実」や異年齢者等との多様で幅広い人間関係を得ることができず，モデルとすべき生き方を見つけにくい状況に置かれている。このことは，不登校をはじめとする生徒指導上の様々な課題とも無縁ではない。

各種報告等では，人間関係をうまく築くことができない，自分で意思決定できない，自己肯定感を持てない，将来に希望を持つことができない，進路を選ぼうとしない等々といった子どもたちが増えつつあることが指摘されているが，これらは子どもたちの成長・発達上の課題が相当に根深く深刻なものであることをうかがわせるものであろう。

しかし，その一方，働くことや生きることに対する子どもたちの関心や意欲は低下しておらず，潜在的な資質・能力が高いことを裏付ける事例も少なからず見受けられる。適切な機会や場が提供され，指導内容や方法等に工夫がなされれば，子どもたちの豊かな可能性は，予想以上に大きく開かれるに違いない。

これからの教育においては，子どもたちが置かれている今日の状況をしっかりと認識するとともに，目の前にいる子どもたちの実像を見極め，子どもたちの成長と発達をどのように支え促していくのかという視点に立って，きめ細かな温かい取組を展開していくことが強く求められる。

(2) 高学歴社会におけるモラトリアム傾向

子どもたちの発達の変容は，少子高齢社会，高学歴社会の到来とも深くかかわっている。

近年，少子化や家庭の経済的ゆとりの増大，高学歴志向等を背景として，大学，短大，専門学校等の高等教育機関に進学する者の割合は著しく上昇してきた。そうした動きに伴

って，若者が職業について考えたり選択・決定したりすることを先送りする傾向，いわゆるモラトリアム傾向が強くなり，進学も就職もしようとしなかったり，進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者が増加していることが指摘されている。

成熟した社会にあって，多くの若者が高等教育を志向することは，必然的な流れとも言えるものであるが，そうした高等教育は卒業後の進路や職業への系統的準備の教育を含んだものであることによって十全なものとなり得る。しかし，現状は必ずしもそうなっておらず，また，高等学校，大学双方において，こうした視点に立った改善の取組はあまり進んでいないことも事実であろう。安易な高学歴志向やモラトリアム傾向は，それを許容する学校教育の在り方に内在する問題でもあることを踏まえ，今後，この面での取組を飛躍的に強化していくことが求められる。

なお，高学歴志向やモラトリアム傾向の背景には，この要因のほか，保護者自身に，とりあえず進学させさえすればという意識が強かったり，必要以上に長期にわたっての子どもの経済的依存を許容したりして，若者の自立を阻害していることなどが考えられる。保護者の意識や養育態度の在り方も，今後の大きな検討課題であることを提起しておきたい。

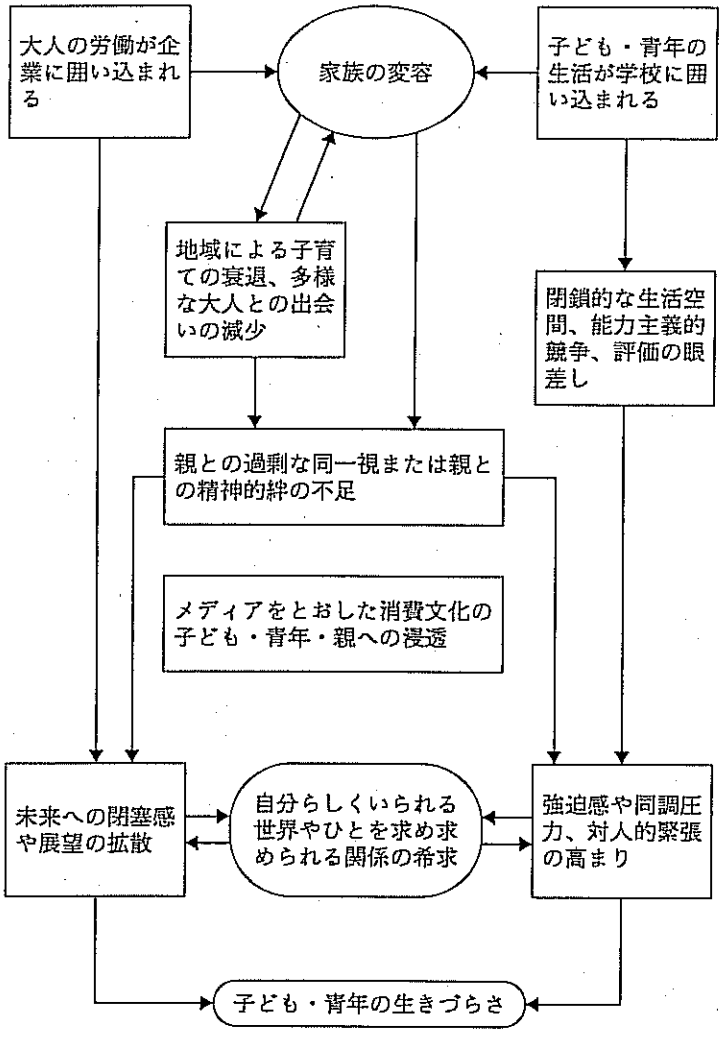
これらの課題は，社会の成熟化や生活環境の変化等によって，必然的にもたらされるものという側面を持っている。しかし，それは同時に，そうした側面に気付きながら，子どもたちへの適切で有効な働きかけを十分行ってこなかった大人社会の在り方やその責任が問われる問題でもある。

激しい社会変化に伴う「接続」や「移行」をめぐる環境は激変し，これと並行して子どもたちの発達上の課題が顕著になってきている。このような状況を踏まえ，今，教育をどのような方向に変革していけばいいのか。また，そのことを通して，２１世紀の変化の激しい流動的な社会を力強く生きていくために必要な資質や能力をどう育成していくのか。キャリア教育には，「生きる力」を身に付けるという時代の要請に応えていく重要な役割が期待されている。

「自立」をめぐる問題

○若者たちがおかれている状況

子ども・青年の生きづらさ



白井利明『大人へのなりかた』新日本出版 2003

・それへの取り組み：若者「自立」への取り組み

『若者自立・挑戦プラン』・・職業的自立

『青少年育成施策大綱』・・社会的自立（青少年が就業し、親の保護から離れ、公共へ参画し、社会の一員として自立した生活を送ることができる）

『若者の包括的な自立支援方略に関する検討会議報告』・・社会的自立

社会のための若者の自立？

＊キャリア教育

○「大人」になること

西平直喜『おとなになること』東京大学出版会 1990

「おとな」の意味

（宮本輝『海岸列車』毎日新聞）

「社会がどうのこうのって言っているあいだは、おとなじゃないのよ」

「私、自分をおとなだとは思っていません。」「人間が本当の意味でおとなになるのは、５０歳を過ぎてからなのよ。でも、幾つになっても、おとなになりきれない人がいる・・・。」

「お兄さん、何もかも捨ててしまうつもり？　お兄さんは、もうおとなでしょう？　その時その時が楽しければいいの？」

（18歳の大学生を観察して）

「ある部分においては、おとな以上におとなだが、それはある年齢に達した子どもだからであって、・・・話して聞かせたとて理解されはしない」

「３０を過ぎないと、本当の意味では、仕事ができないって思ったからね。２０代ってのは、おとなになりきれないんだな、とくに男はね。」

「・・・僕は、いま２５歳なんてまだガキだっていったけど、もっとちゃんとした言い方をすれば、未熟なおとななんだよ。おとなの仲間入りして、まだ日が浅い。いろんな失敗をして当たり前じゃあないか。」

成人性基準

現実順応、人格的成熟、価値観確立、主体性確立、自己抑制、国・社会への関与、親からの自立、礼儀作法

表

成人性基準の因子構造

	調査項目	因子負荷量 I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	h^2
1	結婚して家庭生活を送る	.66	−.01	.04	−.02	.00	.04	.15	.16	.45
3	世の中のしきたりに従う	.43	.11	−.02	.07	.03	.13	.09	.06	.24
6	細かな理屈よりも妥協	.56	.20	−.11	.03	.31	.01	−.01	−.02	.47
7	理想や夢でなく現実	.56	−.18	−.02	.12	.23	.06	−.03	.03	.43
11	安定した職業	.61	.00	.23	.09	.02	−.04	.06	.15	.47
23	遊び・レジャーより仕事	.47	.08	.07	.26	.15	.26	−.01	−.01	.40
29	先祖の墓や仏壇を大切に	.65	−.01	.05	.12	.07	.16	−.20	.09	.52
5	他人の忠告・批判の受容	.11	.52	.01	.14	−.02	.15	.08	.14	.36
8	自分の行為に責任がもてる	−.05	.31	.10	.25	.08	.15	.16	−.00	.23
9	自分の欠点や限界の理解	.14	.47	.19	.15	.30	.05	.30	−.05	.41
13	腹が立っても人前では我慢	.24	.43	.15	.05	.22	.03	.03	.16	.35
14	相手の立場をよく考え行動	−.01	.62	.21	.12	.10	.11	−.03	.21	.52
25	感情のコントロール	.13	.48	.14	−.00	.10	.04	.14	−.02	.31
31	周囲の人びとへの思いやり	−.05	.46	.35	.18	.06	.17	.07	.27	.49
10	信念をもって生きている	.09	.37	.53	.20	.03	.12	−.00	.02	.49
21	自分なりの価値観の確立	−.13	.20	.50	.21	.18	.14	.23	.05	.47
26	明確な生きる目的をもつ	.11	.25	.66	.20	.01	.11	.11	−.02	.59
15	人との約束の厳守	.17	.28	.02	.46	.14	.25	−.01	.11	.42
17	自分に不利でも信念を主張	.09	.11	.24	.41	.14	.11	.12	.09	.31
22	仕事にうちこんでいる	.38	.04	.22	.47	.09	.10	.04	.11	.46
32	困難な事態でも頑張り通す	.25	.12	.19	.49	−.00	−.02	.15	.12	.39
33	決断力がある	−.00	.30	.32	.39	−.06	.03	.16	.10	.39
16	必要なときにはウソも使う	.15	.11	.04	.01	.61	.10	.09	.08	.44
18	孤独に耐えることができる	.13	.27	.15	.19	.43	.00	.13	−.02	.36
20	人前で泣かない	.30	.00	.30	.13	.32	−.04	.12	.08	.33
24	長いものにはまかれろ	.46	.08	−.03	.03	.50	−.01	−.03	−.01	.48
27	日本の現状・将来を考える	.05	.17	.28	.17	.11	.41	.17	.20	.40
28	国家の一員としての義務	.23	.15	.06	.16	.00	.69	.02	.04	.59
30	地域社会への積極的関与	.14	.21	.28	−.02	.05	.36	.06	.04	.29
4	経済的に自立している	.14	.14	.08	.14	−.01	.05	.61	.05	.44
19	両親からの情緒的自立	−.08	.10	.16	.07	.25	.05	.56	.06	.44
2	正しい敬語が使える	.22	.16	−.00	.07	.04	.09	.17	.55	.42
12	礼儀正しい	.32	.20	.11	.26	.05	.05	−.06	.63	.63
	分散寄与率（%）	13.1	9.9	7.7	6.5	5.8	4.7	4.4	4.3	56.4

［古市裕一，1984］

下北研究

①家族役割の変容（結婚、子ども誕生、家建築、分家、父死亡・・）

②職業的技術、職業的役割の変化（仕事全体への見通し、コツ・カンの習得、地位の上昇、部下をもつ、責任を持つ、専門性、資格、独立自営、職業水準高度化）

③地域社会への貢献（地域の仕事をする、PTA 役員、町内会役員、地域青少年育成活動）

「成人形成期」１８～２５歳　　J.アーネット

青年期の延長によって生じた新しい時期

＊意味内容と幅の広がり

・「社会人」ということ

社会参加

○民法の成年年齢

「社会人」に対応

○１８歳にすべき

人間の発達や成熟は個人に閉じられたものではなく、関係の中でとらえられる
時間がたてば成熟するのではない
いかなる経験をするか

社会参加によって「社会人」になる

○教育の充実

社会参加

一つの可能性・・・キャリア教育